

大田区議会北京市朝陽区・大連市親善訪問団報告書

令和7年度大田区議会北京市朝陽区・大連市親善訪問 概要

- ◆期 間 令和7年11月4日（火）～ 11月7日（金） 4日間
- ◆訪問都市 中華人民共和国 北京市朝陽区、遼寧省大連市
- ◆団 員 団 長 高瀬 三徳 副団長 田島 和雄 秘書長 伊佐治 剛
 団 員 えびさわ 圭介 団 員 椿 しんいち
- ◆行 程

	月 日	都 市 名	スケジュール
1	11月4日(火)	東京（羽田） 発 北京市 着	日本航空 J L 25 便（エコノミークラス） 北京市朝陽区人民代表大会常務委員会表敬訪問 北京市朝陽区人民政府表敬訪問
2	5日(水)	北京市 北京市 発 大連市 着	北京市人民対外友好協会表敬訪問 中国国際航空 C A 8910 便（エコノミークラス） 大連市外事弁公室との懇談会
3	6日(木)	大連市	大連市中日友好協会表敬訪問 大連市人民対外友好協会との懇談会
4	7日(金)	大連市 大連市 発 東京（羽田） 着	大連市人民代表大会表敬訪問 大連市人民政府表敬訪問 日本航空 J L 24 便（エコノミークラス）

◆経 費 等

（1）議員5人分 計1,939,910円

内 訳 (1人あたり 387,982円)	航空賃など交通費、 親善訪問経費他	289,072円	航空賃、空港税、空港施設使用料、 現地車（バス）賃、通訳料、添乗員同 行費用他
	宿 泊 料 他	54,700円	宿泊料金、食事料金（朝・昼・夕）
	宿泊手当 他	44,210円	宿泊手当、渡航雑費等

（2）宿泊ホテル

北 京 長富宮飯店（1泊）
大 連 大連富麗華大酒店（2泊）

はじめに

団長 高瀬 三徳

この度、2025 年 11 月 4 日から 7 日までの 3 泊 4 日の日程で、中華人民共和国の友好都市である北京市朝陽区、並びに友好協力関係都市である大連市への大田区議会による親善訪問がなされ、当該訪問団の団長を務めた。大田区と各都市との友好関係の発端は天野元区長時代に遡り、その後も西野元区長、松原前区長、そして鈴木区長へと、その関係は永年にわたり継承されている。具体的には、1976 年（昭和 51 年）に天野区長が朝陽区を訪問し、友好交流を開始したことに起源を持つ。両区長の相互訪問や青少年交流を積み重ね、日中平和友好条約締結 20 周年を迎えた 1998 年（平成 10 年）9 月 21 日に正式な友好都市協定を締結した。この合意書により、文化、スポーツ、教育、産業経済分野での交流推進を確認し、朝陽公園に記念碑が設置された。両区は国際空港（羽田空港・北京首都国際空港）を擁する点で共通し、都市機能の類似性も交流の基盤となっている。以降、青少年相互訪問団の派遣・受入れ、ホームステイ、文化イベント、行政視察などが定期的に実施され、草の根レベルの相互理解を深めてきた。コロナ禍（2020～2022 年頃）で直接交流が中断した時期は、ビデオメッセージやオンライン交流で関係を維持した。2023 年以降は本格再開し、2024～2025 年度にかけて訪問団の相互派遣が確認されている。本年の訪問により、政府・議会との意見交換を行い、友好関係の継続を確認した。この際、昨年大田区に来訪くださった、朝陽区人民代表大会常務委員会の陳宏志主任から代わった王旭主任を中心に大歓迎を頂いた。大田区としては今後、2024～2028 年度の「国際都市おおた」多文化共生推進プランでも、朝陽区との交流を海外友好都市事業の柱の一つとして位置づけ、区民レベルでの異文化理解促進を進めていく所存である。尚、この関係は、日中地方自治体間の象徴的な友好事例として、複雑に変化する国際情勢の変動の中でも持続的に維持されており、将来的にはオンライン活用や共同プロジェクトの拡大も期待されるものと考え

大田区と大連市（遼寧省）の覚書締結は、2009 年（平成 21 年）10 月 28 日に行われ、当時の永井敬臣議長と、大連市人民代表大会常務委員会の陳利民副主任（現・次世代ケア工作委員会主任）により「友好協力関係都市に関する協定書」（友好協力関係都市協定）を締結した。これにより、正式に友好協力関係が



確立された。両市の交流の基盤は従来からの産業経済分野での深い結びつきにある。2007年9月、社団法人大田工業連合会と大連経済技術開発区工商連合会が友好交流に関する協定を結び、日本企業の進出が活発な大連市の経済ハブ機能と、大田区の羽田空港を擁する国際都市・中小企業集積地の特性が相まって、連携が加速した。これを行政レベルで制度化するため、2009年に協定が調印された。協定の内容は、教育（青少年交流）、産業経済、文化・スポーツ分野での相互協力を推進するもの。主な目的は、両市の友好交流を促進し、青少年の国際的視野を広げ、日中両国の相互理解を深めることである。締結以降、毎年大連市からの青少年代表団（約30名規模）の受入れを実施し、学校交流、表敬訪問、ホームステイなどを通じた草の根レベルの交流が継続され、また行政視察や経済情報交換も行われ、産業連携の基盤を強化してきた。コロナ禍（2020～2022年頃）で直接交流が中断した時期は、ビデオメッセージやオンライン形式で関係を維持してきた。2023年7月には羽田一大連直行便が就航し、人的交流が一層活性化されることとなった。同年11月には、大田区議会が大連市を親善訪問し、関係強化を確認した。2024年（令和6年）2月27日には、大連市側からのお話もあり、締結15周年を記念した式典を大田区産業プラザPiOで開催した。これには大連市政府の陳紹旺市長をはじめ、13名の代表団が来訪し、鈴木晶雅区長らが出迎え、産業・青少年交流の成果を振り返った。式典では、伝統工芸の実演なども行われ、和やかな雰囲気の中で今後の協力が確認された。この友好協力関係は北京市朝陽区との友好都市交流と並行して維持されるべきものであると考えており、現に日中地方自治体間の実務的・持続的な協力モデルとして機能しているものとする。2024～2028年度の「国際都市おおた」多文化共生推進プランでも、大連市との交流を海外友好都市事業の柱の一つに位置づけ、区民レベルでの異文化理解促進を進めている。将来的には大連市についても、オンライン交流の拡大や共同プロジェクトの深化を図る余地があるものとする。今回の親善訪問においても、「古い友達」である陳利民氏や、覚書締結時に外弁公室にお勤めで通訳をお務めになった姜春梅氏（現・中国人民対外友好協会副会長）の両名も6日の夕食会にご出席くださり、熱烈に歓迎くださった。往時を思い起こしながらの歓談は、大いに感慨深いものがあつた。また同会にご同席くださった趙燕萍大連市中



神谷中医での記念撮影

日友好協会常務理事は、毎年のように大連市の児童生徒たちの大田区への来訪を引率して下さっており、関係の深化・強化にご尽力を頂いている。このような方々との直接の懇談を通して、これまでの経緯やその意義、またそれらの維持発展の重要性について再認識

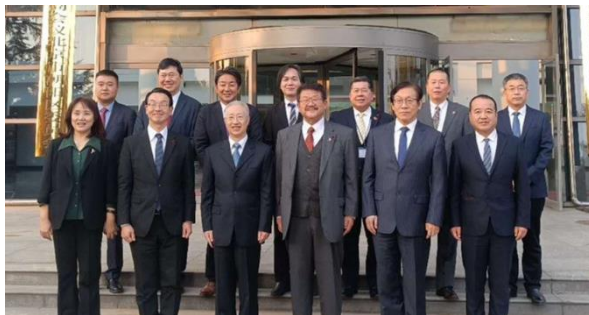
するとともに、今後の事業継承についても様々な観点が懇談の話題となるなど大変意義深く感じた。

今次の親善訪問で感じたことは、自治体間の友好関係は、国同士の外交関係が緊張したり変動したりしても、比較的影響を受けにくく、持続しやすい点で非常に重要であるものと再認識した点である。国家レベルの政治・軍事問題が表面化すると、首脳会談や経済関係が中断される一方、地方自治体同士の交流は「草の根」の性格が強く、住民レベルの相互理解、文化・教育・産業の日常的な協力が中心となるため、感情的な対立に巻き込まれにくい。大田区と北京市朝陽区や大連市の長年にわたる青少年交流や経済連携においても、日中関係が厳しくなった時期においても、訪問団の派遣やオンライン形式で継続されてきた経緯がある。こうした関係は、将来の世代が互いを隣人として認識する基盤を築き、外交の緊張を緩和する緩衝材にもなり得るものとする。また、具体的な課題解決（防災、環境、教育、観光振興などの個別の行政課題等）で実益を生み、住民の生活を豊かにする。国同士の関係が揺らぐ時代にこそ、自治体レベルの地道な友好が、真の信頼構築に不可欠であり、その意義は大きいものであると考える。

北京市朝陽区人民代表大会常務委員会訪問

団員 椿 しんいち

朝陽区は、東京から時差 1 時間、航空機で約 3 時間半の距離に位置している。本区との交流の歴史は古く、1976 年、当時の天野区長の初訪問を契機に友好関係が始まった後、相互訪問や青少年・産業交流を重ね、1998 年に正式な友好都市提携が締結された。今年で交流開始から 49 年目を迎え、議会としての公式訪問は 14 回目となる。



北京市朝陽区人民代表大会との記念撮影

朝陽区側の出席者

- | | |
|--------------------------|-------|
| ・朝陽区人民代表大会常務委员会主任 | 王 旭様 |
| ・朝陽区人民代表大会常務委員会副主任 | 許 嘉寧様 |
| ・朝陽区人民代表大会常務委員会弁公室主任 | 王 東勝様 |
| ・朝陽区人民代表大会常務委員会教科文衛弁公室主任 | 付 小賀様 |
| ・朝陽区人民政府外事弁公室党組書記・主任 | 林 琳様 |
| ・朝陽区教育委员会主任 | 徐 志輝様 |
| ・朝陽区人民政府外事弁公室副主任 | 李 海波様 |
| ・朝陽区人民政府党委員会副書記 | 馬 恒様 |
| ・北京外国語大学日本文化研究室教授 | 郭 連友様 |

朝陽区の人口は約 343.9 万人で本区の約 4.6 倍、面積は 470.8 平方キロメートルで約 7.8 倍である。児童・生徒数は約 34 万人、小中学校数は 500 校を超えている。北京市内で 2 番目に大きな区であり、政治・経済に加え、2008 年夏季および 2022 年冬季の北京オリンピックのメイン会場となるなど、文化・産業面でも中心的な役割を担っている。

朝陽区人民代表大会常務委員会に到着した際には、正面玄関にて丁重な出迎えを受けた。

冒頭、両区の出席者紹介の後、王主任より歓迎の挨拶が行われた。

挨拶では「一衣帯水の隣国」という言葉を用い、日中国交正常化以降の交流の歴史や、朝陽区の発展状況について言及・報告があった。

農業や工業は朝陽区の主な産業であったが、現在の朝陽区は北京市で最も経済が進んでいる地域でもある。また、朝陽区は中国においても海外交流の重要な位置づけで発展を遂げ、ビジネス・スポーツ・文化も含め住みやすい朝陽区の建設を目指している。

北京の在外国人の半分は朝陽区に住んでいる。また、約 8 割の国際商工会議所、多国籍企業の約 7 割が朝陽区にある。北京で行われる国際会議の 50%が朝陽区で行われている。

朝陽区は現在 25 か国 31 の行政都市と友好交流関係を構築し、その中の一つに大田区もある。東京都では大田区以外に港区とも友好関係がある。

また、今後の定期的かつ友好的な交流、都市建設やビジネス環境の最適化、特に青少年交流の一層の強化についての意向が示された。これを受け、高瀬団長より本区の概要や HICity、子どもたちの英語教育の取組等について説明を行った。

後半は朝陽区教育委員会も交え、青少年交流を中心とした意見交換が行われた。朝陽区と東京都内の学校との姉妹校交流の事例が紹介され、本区との交流についても将来的な検討を期待する旨の提案があった。

意見交換終了後、記念品交換が行われた。その後、正面玄関にて記念撮影を実施し、表敬訪問を終了した。

北京市朝陽区人民政府(歓迎宴)

団員 椿 しんいち



北京市朝陽区人民政府との交流



北京市朝陽区人民政府との交流

朝陽区側の出席者

- | | |
|-----------------------|-------|
| ・ 朝陽区人民政府副区長 | 張 梅様 |
| ・ 朝陽区人民代表大会常務委員会弁公室主任 | 王 東勝様 |
| ・ 朝陽区人民政府外事弁公室副主任 | 李 海波様 |
| ・ 朝陽区教育委員会主任 | 徐 志輝様 |
| ・ 朝陽区人民政府党委員会副書記 | 馬 恒様 |
| ・ 朝陽区人民政府外事弁公室国際交流科 | 温 穎様 |
| ・ 北京外国語大学日本文化研究室教授 | 郭 連友様 |

歓迎宴は、張副区長による歓迎の挨拶および高瀬団長による謝辞の後、乾杯をもって会食が始まった。朝陽区参加者の7名のうち教育委員会を含めた5名が15時からの表敬訪問時の参加者だった。挨拶の内容は朝陽区と大田区との歴史や大田区議会からの長年にわたる訪問に対し、歓迎するとともに感謝の言葉を頂戴した。

また、張副区長は流ちょうな日本語で、自身のこれまでの日本との関わりや外交分野での経歴についても紹介があった。

会食中は円卓を囲み、青少年交流をはじめ、幅広い話題について率直な意見交換が行われた。

円卓の隣の環境によっては、隣同士母国語しか話せない場合もあり、言葉の壁についての話題になった場面で、「我々大人が心配しているよりも、子供たちは言葉の壁を乗り越えている」という共通の結論に至り、区民同士、足元からの民間外交の重要性について全員で確認しあった。

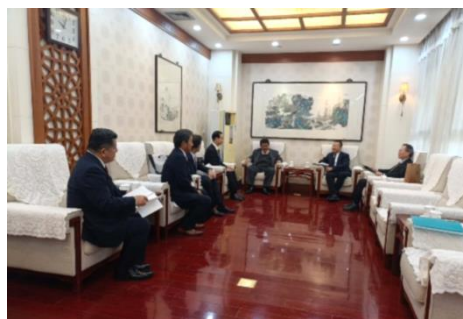
本訪問を通じ、約50年にわたり築かれてきた両区の友好関係の重みを改めて実感した。青少年交流、とりわけ小中学校段階での交流の可能性については、今後検討に値するものと考えられる。日中関係を取り巻く環境が変化する中であっても、これまで先人が築いてきた信頼関係を基盤とし、親善訪問を継続していくことの重要性を強く認識する機会となった。

北京市人民対外友好協会 表敬訪問

団員 えびさわ 圭介



北京市人民対外友好協会との記念撮影



北京市人民対外友好協会との交流

懇談者

北京市人民対外友好協会副会長 焦 彧童 様

北京市人民対外友好協会アジア部 盧 燕寧 様

北京市人民対外友好協会を代表し、北京市人民対外友好協会副会長 焦 彧童 様より安定した日中関係はアジアと世界の平和の重要な礎であり、一般市民の幸福にとって極めて重要であると強調され、また、両国は高齢化やポスト不動産時代における経済変革といった共通の課題に直面しており、相互学習が不可欠であるとの指摘があり、日中友好のために個人的な時間と費用を捧げている人々の情熱に心から敬意を表し、両国民の相互理解を促進するために政府と国民が協力すべきだと表明された。

大田区訪問団を代表し、高瀬三徳 団長より 1970 年代に国交正常化による両国関係に加えて大田区と北京市朝陽区が 1998 年に正式に姉妹都市提携を締結した友好交流の歴史を振り返り、市民に平和で安定した生活環境を提供することが最優先事項であり、また、コロナ禍によって中断された青少年交流の再開や日本が直面している現在の経済難についても言及し、共通の文化が両国の友好を繋ぐ架け橋であることを示した。

双方の代表は、現在の複雑な国際情勢において、両国民にとって平和で安定した環境を維持することが極めて重要であると強調し、懇談は日中友好の促進には官民が協力して相互理解を深めるべきであることで一致した。

特に、青少年交流や高齢化社会への対応といった課題に着目し、双方は高齢化社会や経済構造改革といった共通の課題を認識し、相互学習と継続的なコミュニケーションの重要性を確認した。

さらに、日本では今年、暑い夏を経験し、その異常気象は急速な経済発展と環境バランスの関係についても改めて考えさせられるきっかけとなり、環境保護自体が開発課題であ

り、戦後復興の東京と「世界の工場」への変貌を遂げた中国は、どちらも「汚染→処理→保護→開発」という共通の道を歩んできた。

訪問団から中国の環境意識と政策に大きな関心を示し、質問をしたところ、中国人の環境意識は現在非常に高くなっていること、過去数十年にわたり、私たちは環境汚染の直接的な被害者であり、特に北京のような深刻なスモッグが発生した地域では顕著で、中国政府は過去 20 年間、環境ガバナンスに多額の投資を行い、多大な努力を注ぎ込み、目覚ましい成果を上げ、スモッグは大幅に軽減され、今や、「清らかな水と緑豊かな山々はかけがえのない財産」という考えが人々の心に深く根付いている。

もし人々が開発と環境保護のどちらかを選ばなければならないとしたら、過去の深刻な汚染を経験した中国国民の環境意識は高いレベルに達しており、環境保護は単なる経済成長よりも優先されるべきだという共通認識が形成されていること、大多数の人は環境保護を選び、これは開発の過程の一つであるとのことを強調され、東京も戦後、公害と浄化の過程を経験し、今後も開発の過程で過去の過ちから学び、公害によって健康と環境を害するという過ちを繰り返さないことを願っていると述べられた。

中国に訪問し、中国政府の環境保護に資する取り組みで排ガスの問題が挙げられるが、その環境問題への取り組みを実感したのは、過去に訪問した中国では、車、自転車ですみ尽くされた道が車や原付バイクで溢れ、大気汚染などが深刻化したことに、国策として排ガス規制、EV バイクの導入に転換し、急増する EV バイクの状況を目の当たりにした。

今日のグローバルな分業体制がますます専門化している状況において経済発展と環境保護バランスをどのように取るかは、すべての国、特に発展途上国が継続的に取り組む課題であると考ええる。

現在の共通の課題では、北京と東京は、高齢化や不動産経済からの脱却といった共通の社会問題に直面している。これは、双方が互いの経験から学び、高齢者介護などの分野で協力を深めるための確固たる基盤と協力の機会を創出することであると考ええる。

日中両国が高齢化社会という課題に直面していると述べた際、直近では市民交流として「高齢者ケア」に焦点を当て東京から高齢者ケア団体を招き北京の関係機関や政府機関との意見交換を行なった経緯があり「大田区でも高齢化が進んでいるとのことだが、地域密着型の高齢者ケア、介護サービス、高齢者の復職支援などについて、直接的な経験は、北京の他の地区にとっても非常に貴重です。」と大田区の具体的な取り組みや成功事例を教えていただきたいとの要望に、実践的な意見交換、経験共有を行なった。

不動産経済からの脱却に関しては、中国もパンデミック以降、不動産問題に直面しており現在は不動産にかわる経済成長を牽引できる産業を見つけることが困難だと述べられ、我々も約 30 年前に不動産バブル経済の崩壊を経験し、IT 業界の躍進、新たな不動産ブームなど特定のセクターの過熱を現在は警戒していると伝えた。

円安による日本経済の困難と海外旅行意欲の低下について言及した際には、日本国内での物価の上昇、賃金の停滞は国民への経済的圧力を高め、海外旅行費やその他の支出を減少させている。

現在の経済状況が日本人の旅行に影響を与えている費用面以外に影響を与える要因は何かあるか？現代の若者のニーズにより適した、より魅力的な交流プログラムを設計するために、両国はどのように協力すべきか？対話は問題点の提示から解決策の共同模索へと進み、これらの障害を克服し、共に交流を促進するための議論を行う絶好の機会となった。

今後も日本の若者の中国との交流への意欲向上として、青少年交流をパンデミック以前のレベルに回復するように努め、「平和、安定、発展」という共通目標の達成に向け双方は草の根レベルの視点から、より有意義な交流活動を推進するために協力し、朝陽区と大田区との間で、あらゆるレベルでの友好交流を継続的に促進し、都市間のより具体的な協力をしていきたいとの双方合意で締め括った。

大連市中日友好協会 表敬訪問

団員 えびさわ 圭介

第1部 大連市中日友好協会協力企業との交流



大連市中日友好協会協力企業との交流

大連市中日友好協会協力企業との記念撮影

懇談者

中国大連国際経済技術合作集团有限公司共産党委員会書記 王 軍 様

中国大連国際経済技術合作集团有限公司社長 高 毅 様

中国大連国際経済技術合作集团有限公司副社長（通訳） 王 英 様

中国大連国際経済技術合作集团有限公司業務部副部長 王 海婷 様

中国大連国際経済技術合作集团有限公司弁公室主任 崔 永濤 様

中国大連国際経済技術合作集团有限公司共青团書記 林 美華 様

中国外経企業協会副秘書長 聶 開娟

前半は、大連市中日友好協会内の協力企業の皆様とも一緒に交流、懇談をさせていただいた。

正式名称は「中国大連国際経済技術合作集团有限公司」で、1984年に国务院の認可を受けて設立され、国際経済技術協力において国を代表する国有企業として国务院の認可を受けている。

中国大連国際経済技術合作集团有限公司の代表からは、同社はシンガポール、韓国、日本、ロシア、ニュージーランドなど世界各国で事業を展開しており、地域に人材を派遣し、同社従業員は建設、道路、公共事業、水力発電、エネルギー、環境など、複数のプロジェクトに参加し、技術コンサルティングや資産提供、プロジェクト管理まで、包括的なサービスを顧客に提供している。

主要事業は、約40年にわたる発展を経て成長し外航海運、遠洋漁業、国際エンジニアリング請負、国際貿易、労使協力、不動産開発、建設など現在では7つの主要事業分野を有している。

外航海運ではシンガポールに大型海運会社を所有し15隻のドライバルクキャリアを運航し、遠洋漁業では18隻をアフリカに漁場を有している。

国際エンジニアリング事業では 10 カ国以上で数百件のプロジェクトを手掛け現在はアフリカと南米に建設拠点を有し国際貿易事業ではトヨタや三菱などの日本ブランドの自動車を輸入しているなど多岐にわたる。

労使協力としては技能実習生派遣事業を 3 つの支社が担当し、過去 40 年間で累計 7 万人から 8 万人の技能実習生を派遣しており、これは創業期の主要事業であった。

特に日本への技能実習生の派遣は事業の重要な部分を占めており、当社の発展は日本のパートナーの皆様のご支援とご尽力に支えられていることを強調し深く感謝の意を述べられた。

過去の派遣、交流の経験では、2011 年の東日本大震災の際に日本のパートナーの皆様と築かれた「生死を分ける絆」について、当時、当社は 1 万 2000 人以上の研修生を日本に派遣しており、全員の無事が確認出来たこと、そして宮城県女川市の水産会社のパートナーである佐藤氏が、16 名の中国人技能実習生を無事に避難させた後、悲劇的な死を遂げたことを悲しみ、その行動に対し深く感謝の意を表するとともに、哀悼の意が示され、この出来事は、ビジネスを超えた両者の深い友情を感じたことを表された。

その後、全社員と大連市政府が自発的に被災地に義援金を寄付し、弔問のために代表団を率いて日本に訪れた佐藤氏のご遺族が迎えた唯一の外部代表団となり、この経験は単なるビジネス関係を超え、「生死を共にした友情」へと発展し佐藤氏のことを永遠に記憶に留めると述べられた。

大田区訪問団 高瀬団長からは、大田区は羽田空港を擁し、ハイテク企業、中小製造企業、そして職人技が光る産業で知られているが、直面する課題として製造業の数が、20 年前の約 1 万社から、現在では 3,000 社強にまで減少し伝統工芸産業は、高齢化と後継者不足に直面していることなどから羽田イノベーションシティに世界最先端の研究機関や医療機関を誘致し、医療ツーリズムを推進していることを示した。

また、親善交流の成果として羽田空港と大連空港との直行便の就航が実現したこと、大田区政 40 年来の悲願である羽田空港に接続する新空港線建設を推進していることを伝えた。

国際都市おおたを表明する大田区として「多文化共生」の理念を掲げ、外国人を積極的に受け入れ、外国人材の交流なども行われている。

大連市からは、大田区とのウェルネス・ヘルスケア（高齢者介護）産業への将来に向け協力をしていただけることが重要と考えている。大連の気候と自然条件は高齢者介護にとって魅力的であり、ウェルネス・ヘルスケア分野における日本の先進的な技術と経験を高く評価しているからである。

大田区訪問団からは、日本（特に大田区）は深刻な介護士不足に直面しており、将来的に約 2,500 人の不足が見込まれ、人材派遣において中国企業との協力を期待し、日本の先進的な介護経験と技術を中国側に紹介し、新たな産業協力分野も模索したいと考えていることを伝えた。

大連市側からは、自社の技能実習制度を利用し人材面での連携を構築したいとの要望があり、訪問団よりも介護業界が大連市との協力を深める突破口となる可能性を伝え、大田区側も大連市との産業を通じての絆を今後は介護分野（研究開発型産業）を新たな産業分野として開拓をしていきたいとの考えを伝え、今回の交流が、双方の協力によって新たな突破口となり協力関係をさらに深めていきたいと締め括った。

第2部 大連市中日友好協会との交流・昼食会



大連市中日友好協会との交流



大連市中日友好協会との記念撮影

懇談者

大連市中日友好協会理事長 劉 世偉 様

大連市中日友好協会高級顧問 王 舒岩 様

大連市中日友好協会執行副会長 郭 富純 様

大連市中日友好協会秘書長 孔 志安 様

大連市中日友好協会常務理事 趙 燕萍 様

大連市中日友好協会執行秘書長 尹 秀蘭 様

大連市中日友好協会執行秘書長 金 永東 様

大連市中日友好協会執行秘書長 来 永楽 様

大連市中日友好協会参事 楊 坤 様

大連市中日友好協会理事 齊 林 様

大連市中日友好協会と大田区議会の訪問団との昼食懇談会となり、これまでの大連市中日友好協会との交流の歴史を振り返り、今後の双方での協力関係の深化に向けた意見交換を行なった。

大連市中日友好協会の理事長から、訪問団を歓迎し、観光、文化、IT、青少年交流、介護事業など多様な専門性を有する協会のメンバーの紹介、大連と日本の特に大田区との経済・文化的な深いつながりを強調し、人的交流が両地域の発展と相互理解には不可欠であると主張された。

大田区訪問団 高瀬団長より大連市との15年以上にわたる協力関係の歴史を振り返り、特に羽田空港と大連空港との直行便就航における協力の成果は長年に渡り先輩議員から引き継いだ交流が実を結び念願実現に繋がった経緯、非公式な場での人付き合いも現在の良好な関係を築く上で重要であったと伝えた。

今回の大連市中日友好協会との懇談では、人材交流、青少年交流の話題が挙げられた。

メディアの報道に左右されない相互理解を深める上で重要である点、また日本の少子高齢化対策として優秀な外国人材の受け入れを促進すべきであるという点で意見が一致し、文化、IT、介護、スポーツなど多岐にわたる分野での具体的な連携の可能性が示された。

これらの意見交換を受け、私からは、青少年交流の可能性として、スポーツでの交流を挙げた。スポーツは世界共通のルールのもと、言葉の壁を越える最適な手段であり、オリンピックや各種世界大会などの例に挙げ、併せて自身の高校生の時に経験した海外選手とのバスケットボールを通じた青少年交流の可能性を提案し、今後の両国間のみならず、スポーツのみならず文化や芸術分野にも青少年交流を世界に広げていけると伝えた。

日本の若い世代の中国に対するイメージがメディアの影響で必ずしも良くない現状があり、これに対し、若者が自分の目で中国、特に日本との繋がりが深い大連を訪れ、文化や人々を直接体験することが何よりも重要であると伝えた。

中国では、実際に青少年交流に参加した生徒が、その経験をきっかけに日本の大学に合格した成功事例も共有され、直接体験の価値が裏付けられた。

日本の少子高齢化という課題に対し、優秀な外国人材（留学生、労働者、介護人材など）を積極的に受け入れるべきだという意見が出された。

特に、中国の若者は教育水準が高く、文化的な親和性もあるため、質の高い人材となりうると指摘。欧米に流れている優秀な人材を日本に呼び込むため、選考プロセスを中国国内で実施するなど、より効果的な制度設計の必要性を議論し、相互理解を持って懇談は終了した。

大連市人民代表大会常務委員会・大連市人民政府表敬訪問

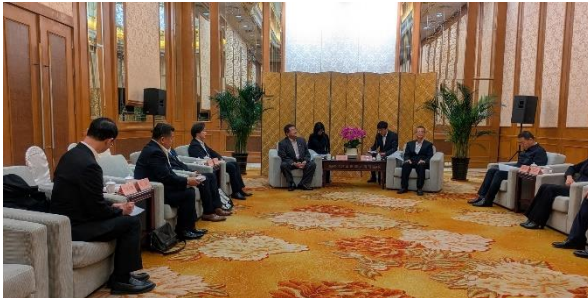
秘書長 伊佐治 剛

大連市人民代表大会と市人民政府表敬訪問は、先方の都合で最終日に合同で行われたが、その前段として、大連市に到着してすぐに空港近くのホテルにて大連市人民政府外事弁公室の成英俊主任主催の夕食会に招待いただいた。成英俊主任とは、2023年に訪問した際にも懇談の機会をいただいた。その際には2009年に大田区と大連市が「友好協力関係都市協定」を結び15周年を迎えることを記念し、「大田区役所及び大田区議会との友好締結15周年記念レセプション」の開催を提案された。この懇談の中でも様々な意見交換がなされたが、訪問団としてもこれらの提案を持ち帰り結果として2023年2月に大田区産業プラザPIOにおいて「大田区・大連市友好協力関係都市15周年記念式典」を開催することができた。今回の訪問時には、我々が大連周水子国際空港に到着してから成主任は1時間後に上海へ出張する予定があったが、訪問団に対して感謝の気持ちを伝えるため急遽、夕食会が開催されることになった。この会の中では友好締結15周年記念レセプションの開催への感謝と、また予定されている大連市人民代表大会の表敬訪問において、常務委員会の王主任と共に上海へ出張中のため徐少達筆頭副主任が対応する旨の報告があった。また、大連と大田区との友好関係が中国の多くの友好都市関係の中で最も密接であることが強調され伝えられた。



懇談する成主任(右)と高瀬団長(真中)

こうした前段があり、大連市訪問の最終日に大連市人民代表大会及び大連市人民政府への表敬訪問を行った。人民代表大会側からは、常務委員会の徐少達筆頭副主任、民族僑務外事委員会の聶雲傑主任、衛生委員会の舒保薦副主任、人民政府からは張曉峰副秘書長、外事弁公室の胡氷俠副主任が出席された。徐少達副主任は、16年前に大連市の魏鳳海元市長と大田区の近藤忠夫元議長の推進により2009年に両地域の人民代表大会と議会、行政機関が同時に友好関係を結んだことを振り返り、友好締結以来、大連市から22の団体、約1,000人が大田区を訪問し、大田区からは24の団体が大連を訪れたことを報告した。特に高瀬団長をはじめとする大田区議会代表団が定期的に大連を訪問する伝統を継続していることに感謝の意を表した。また、両地域間の協力の成果として、大連開発区工商連合会と大田区工業連合会の友好協力枠組み協定の締結や、スポーツ交流に関する覚書の調印を挙げ、また大連周水子国際空港と羽田国際空港の直行便の開設が、中国東北地域と東京を結ぶ唯一の路線として、両地域の人的・物的交流に大きく貢献していることを強調した。その後、大連市の経済について説明があった。大連市が対外開放と1兆円GDP都市を目指して取り組みを進めており、2023年の最初の9ヶ月間でGDP7,248.2億元に達し前年同期比6%の成長を遂げたこと、



大連市人代と人民政府表敬訪問

また大連市の産業基盤の強さ、特に石油化学、大型船舶製造、機関車、ベアリング、原子力発電、化学新材料などの分野で全国をリードする企業が存在することを紹介し、大田区に本社を置くアルプスアルパインやキヤノンなどの企業が1990年代初頭から大連に工場を設立し、共に発展してきたことに言及した。また、文

化観光分野においても、大連市のアカシア祭、国際砂浜文化祭りなどの文化ブランドイベントの開催などによる観光市場の活性化により、2023年1月から10月までの日本人観光客が14万人に達し、前年比52.7%増加したことを強調していた。大連市が日本を最優先して交流を深め、日本企業にとって中国進出の最優先都市となることを目指していると述べた。そして、高瀬団長が両地域の友好関係発展の証人であることに敬意を表し、今後も手を携えて交流を深めていきたいとの意向を表明した。そうしたことを踏まえ、更に以下の3つの分野での協力強化を提案いただいた。

- ①研究開発・イノベーション分野での協力
- ②企業間交流の促進（大田区の約4,000社のハイテク企業と大連市企業との協力）
- ③空港協力の継続的深化（特に大連金州湾国際空港の建設における羽田空港の経験やノウハウの活用）

会談の中では、高瀬団長より2年ぶりの訪問が実現したことへの喜びを述べ、2019年1月に大連市人大常務委員会の劉曉英副主任が大田区を訪問したこと、同年7月には大連市の青少年259名が大田区の9つの小中学校で交流を行ったことを回顧しました。新型コロナウイルスの影響で一時中断していた交流が再開され、活発になってきていることを喜び、今回の訪問を通じてさらに交流を深めたいとの意向を表明した。

その後、交流会が開催され、よりフランクな場での懇談の機会となった。この中では大連の観光シーズンは5月から10月までで、大連の観光スローガン「遇見大連、心動無限（大連に出会い、心が躍る）」のもと、国内外から多くの観光客が訪れていることが紹介され、特に日本からの観光客が増えているとのことであった。また、大連のサッカー文化について話があり、大連は1990年代からサッカーが盛んで、現在も人気が高まっていることが紹介された。大連のスタジアムは6万1千人を収容でき、試合のチケットは数分で売り切れるほど人気があるとのこと。えびさわ団員がバスケットボールの経験者であることも紹介され、スポーツを通じた青少年交流の可能性が議論された。交流会の中では、財経委員会の房建偉主任の大田区訪問時の歓迎に対する感謝の意が表明された。両国の議会外交を通じた協力関係の推進が重要であることが強調され、今後も交流を続けたいという意向が示された。大連

市人民代表大会常务委员会は对外交流の記録や贈り物を大切に保管し、次世代に友好関係の重要性を伝えていることも紹介された。

大連市は、毎回であるが訪問時にはとても温かい歓迎をいただいている。大田区をとっても大切に下さっていることは、訪問したことがある多くの議員が感じていることだろう。しかしながら、長年、青少年交流や企業交流などが続く中、これからの交流における課題もある。その一つが平成 21 年に締結した「友好協力関係都市に関する協定書」である。すでに触れられている通り、この協定書の四つ目の項目には「双方



大連市人代と人民政府主催の交流会

は、東京羽田国際空港と大連周水子国際空港の間の直行便就航に努力する。」との内容があり、すでに達成されている状況がある。交流が始まってから 16 年。「友好協力関係都市に関する協定書」の見直しと共に、更に大連市、大田区が更に実を得られる交流をしていきたい。その一つが、徐紹達副主任から提案のあった研究開発・イノベーション分野での協力、企業間交流の促進である。元々の交流のきっかけである 2007 年の大連開発区工商連合会と大田区工業連合会の友好関係協定を改めて思い出し、区内のものづくり企業にも働きかけをおこないながら産業分野での連携の強化を図っていきたい。

おわりに

副団長 田島 和雄

今回の大田区議会中国親善訪問団は、11月4日から7日までの3泊4日の日程で北京市朝陽区、大連市を訪問し、両都市とも熱烈歓迎を受けた。昨年、大田区と大連市との間で平成21年に「友好協力関係都市協定」を締結してから15周年の節目だったが、諸事情により訪問できなかったため、今回はその意義もこめた訪問だった。

北京市朝陽区では、北京市朝陽区人民代表大会常務委員会、北京市朝陽区人民政府、北京市人民对外友好協会を表敬訪問し、歓迎宴も催していただいた。

大連市では、大連市人民政府外事弁公室、大連市人民对外友好協会、大連市中日友好協会、大連市人民代表大会常務委員会を表敬訪問し、歓迎宴も催していただいたほか、企業とも交流した。

詳しくは各団員の報告をご覧いただきたいが、短い期間にもかかわらず、公式・非公式合わせておよそ50名という、非常に多くの方々とお会いし交流する貴重な機会をいただいたことに、心より感謝を申し上げたい。

大連市での訪問において、関係者の皆様から必ず話題に上がったのは、羽田空港（大田区）と大連周水子国際空港を結ぶ定期直行便の就航（令和5年7月）についてだった。この定期便は、中国東北地域における唯一の東京便であり、その影響力は非常に大きいものがある。定期便の実現までおよそ10年にわたる多くの関係者や先輩方の粘り強い努力の積み重ねがあったことは特筆すべきであり、その尽力に深く敬意を表するものである。

中国には、「飲水思源＝水を飲むときには井戸を掘った人の苦勞を忘れてはならない」という言葉がある。定期便就航の恩義を忘れず、恩義に報いるという気持ちの発露は、現地の方々の言葉の端々に強く感じた。

また、都市の規模からすると本来であれば大田区は大連市の区と交流するのが一般的であるところ、大連市そのものと交流できているのも、先輩方の長年のご尽力の賜物であると実感した。

北京市朝陽区でも大連市でも、現地の方々は私たちのことを「古い友人」と呼んでくださった。長い年月をかけ、定期的に交流を重ねてきたからこそその信頼の深さを、現地で強く感じた。これは現地に行かなければ感じることはできないであろう。

現地関係者からは、この交流を「お金で買えない交流」と表現していた。また、「まず出会い、ふれあい、わかち合うことが重要である」「自分の目を見て、触れて、感じる事が大切である」との言葉もあり、交流の原点を改めて認識する機会となった。

北京市での会食の席では、詳しくは触れないが率直な意見交換を行うことができた。国レベルにとどまることなく、地方レベルで定期的に交流し、率直に語り合うことで相互理解が一層深まることを実感した。

また、現地の方々からは「経済交流のみならず、文化交流、特に青少年の交流にさらに

力を入れていきたい」との意向が示された。次代を担う青少年が国境を越えて交流を重ね、相互理解と友情を育み、平和の架け橋となっていくことを大いに期待し、我々は我々の立場でその礎を築いていく決意だ。

最後に、両都市との友好協力関係を一層強化することができた今回の親善訪問に対し、ご尽力いただいたすべての皆さまに心から感謝を申し上げ、結びとさせていただく。

以上